

図画工作教育講座6 《 評価 》

評価は、子どものランク付けではない。

子どもの能力を伸ばすための活動。

そのためには、

評価した結果をできるだけ早く子どもに返してやること。

例えば、国・算のテスト → テストの内容が、まだ、子どもの記憶にあるから

「あ、『必ず』の筆順はこうだったのか」

「十の位のくり下がりを忘れてたんだ」

と、自分の学習の修正ができる。

余韻を活用
した評価

学期末にまとめて返しても、せいぜい点数を見るだけ。

見もせずに、そのままランドセルに詰め込む子もいる。

採点の労力を最大限活かすために、余韻が残っているうちに返却。

図画工作の評価活動

相対評価	コンクール作品の選び方	他の作品と比べた評価	全体的・総合的に見る
絶対評価	授業作品の評価	授業の狙いに即した評価	部分的・観点別に見る

授業のねらいに即した評価とは、授業目標に基づく評価規準で評価すること。

例えば「遠近のある風景」

①教科書の参考作品で 奥行きや重なりを表現することを知らせる。(授業の目標)

- ②評価規準は、
- * 遠近の分かる場所を選んでいるか
 - * 大(近)と小(遠)で表現しているか
 - * 重なりの工夫があるか

子どもに何を教えたいのか、授業のねらいがはっきりしていると、

- * 導入時の説明が具体的で、子どもに分かり易い。
- * 評価がしやすい。

教師が、授業のねらいを明確に持っていないと、評価規準が曖昧になり、絵の上手い子・先天的に才能のある子が、いつも評価されることになる。

授業の評価は、**教師のねらいに沿って努力した子が正当に評価されなければならない。**

そのための評価規準・授業の目標

では、授業の初めに皆さんが評価した「不思議なお魚」全作品の評価活動について

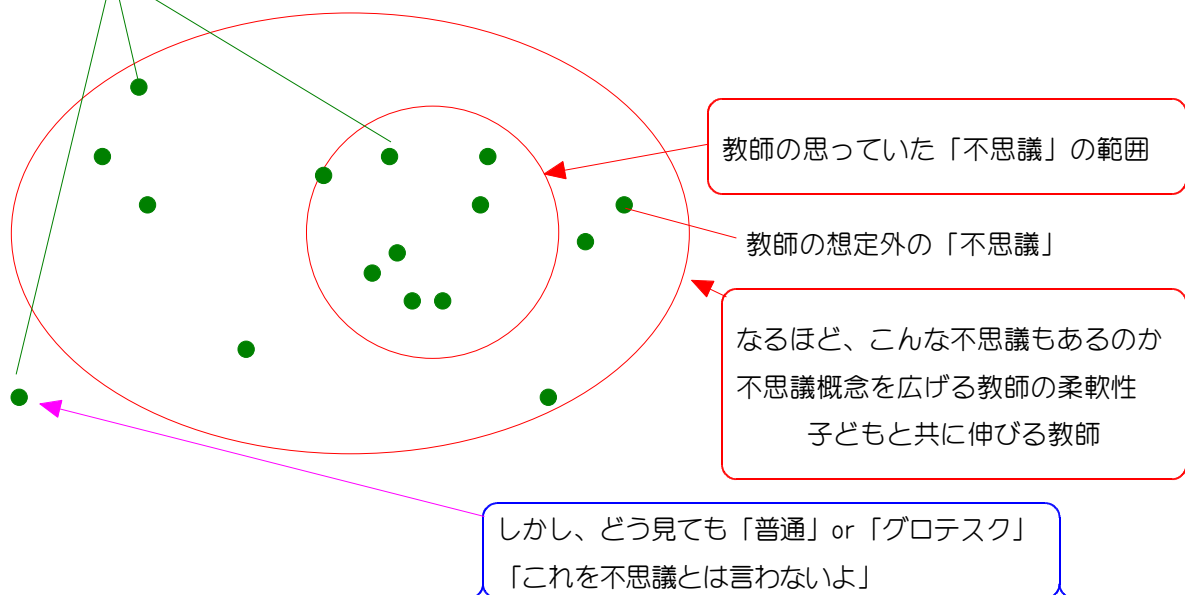
評価項目① 4つのパスの技法が全部使えたかは、自己評価がベストである。

理由1 技法が使えたかどうかは、基準が明確なので自己評価できる。

2 自己評価することで、自分の取り組みを見つめ直す場となる。
 では、基準が曖昧な評価項目②「不思議」の評価活動とは。

これが教育の面白さと難しさです。

「私の不思議は、こんなだよ」と、子どもたちが絵で表現（問いかけ）してくる



教育活動は、知識の伝達だけではない。
 「不思議」の概念も含めて教師の持っている感性や善悪の判断などの価値観を伝える活動
 今、振り返って、あの先生はよかったと思うのは、その先生の生き方・価値観だったのではないだろうか。教育がティーチングマシンでは成立しない部分はこれ。

質問 自分の主観で評価するのは難しい	自分の主観（価値観）を子どもたちに伝えなければならない 学級担任は常に自分の価値観を伝える様々な場面に遭遇する 給食を食べきれない子どもへの指導 帰りの会でのトラブルの指導
子どもの個性を尊重すると評価ができない	個性を評価するのではない。個性を形成するためのデータベースが学習できているかを評価する
図工が苦手な自分は評価に自信がない	図工が苦手だからこそ苦手な子どもの思いが分かる。苦手だというデメリットはちょっと見方を変えれば大きなメリット。柔軟な思考を大事にして欲しい。

* 私自身が学ぶ側として図工の授業を受けていた頃は「上手な人が褒められる」と思っていました。ゆえに、図工の時間は私にとって楽しい時間というよりは、むしろ「下手さをさらすことになる」時間でした。絵画や版画、工作など、どれも苦手で、自分にはセンスがないから向いていないとまで思っていました。

しかし、この講座では、私が子どもの頃からずっと思い悩んできた図工に対するイメージを、半年で崩すことができました。私の中にあった図工の「概念崩し」を実感したのです。

《図画工作というのは、自分の持つ感情を色や形で如何に相手に伝えるかということ。決して上手や下手で評価すべきではない。》この言葉が、今更ですが自信を与えてくれた気がします。

将来、図工を教える立場になった際には「自分の気持ちを色や形で相手に伝える」ことを重要視し、子ども（特に図工の嫌いな子）にそのことを伝えつつ、快く喜びを味わえる時間となるようアプローチしたいと思います。自分自身が図工が苦手だったからこそ、この講座で学び自信を付けてくれたこの言葉を、子どもたちに伝えることができると思います。

* この講座では、絵が上手な人・下手な人ではなく、得意な人・苦手な人という分け方で、どう指導していくかを学びました。図工は、作品で評価することが多いですが、雑な作品に見えても子どもたちの小さな工夫や技法の習得を見逃さないで評価することが大事であると学びました。「図工は画家の卵を育てる教科ではない」という言葉が、とても印象に残っています。「ここがダメだ」ではなく「ここを工夫する方法はないかな？」と、肯定的にアプローチすることが生徒の意欲を引き出すのだなと思いました。

私も絵が得意ではなかったので、こんな指導をしてほしかったなと思い、また小学校時代、あの先生に言われたことは、こんな意図があったのかもしれないと考えることができました。

自分の思いを伝える方法は沢山あるけれど、図画工作教育を通して生徒に少しでも多くの表現方法を身に付けさせることができたら、図工を学ぶ意義は大いにあります。

* 図画工作を評価する際にはやはり先生の主観がつきまわってしまいます。コンクールに選ばれた絵や実物そっくりに描いた絵だけがよい絵だとは限りません。常に「子どもと共に学ぶ教師」として自分の不思議領域を他者の意見を取り入れ伸ばしていくという柔軟性が大事だということを知ることができました。対象物が一つでも子どもの感じ方や思いの表現は人それぞれです。相対的に評価するのではなく、その作品そのものを見て、子どもの思いを読み取っていく。絵はそもそも比較できないものだと思います。

子どもが学校で習った技法を、ただ知識としてインプットするだけでなく、それらの技法をどういうふうに使えば自分の思いが相手に伝わるだろうと試行錯誤する。その過程が子どもの表現力や創造力を伸ばし、育むことができるのだと思いました。

* 私が受けていた図工の授業は、上手い下手で評価し、一つでも多くコンクール（作品展）に出すことが出来るように先生達が厳しく、ときには先生自身が描いたりしていました。山を塗るとき、遠くから見ると青色や緑色に見えますが、近くから見ると赤色や黄色の葉もあつたので自分の思うとおりに塗っていたら「なんでこんなことするの！」と怒られたことがあります。子どもというのはすごく弱いもので、1回いやなことがあると全てその授業が嫌いになってしまいます。

評価についての講義での先生の話、「子どもと共に伸びる教師」「子どもに学ぶ教師」子どもの考えを取り入れるその柔軟性。私の理想像そのものです。あの日、山を赤や黄色で塗った私に「そうだね。山の色は赤や黄色もたくさんあるね。」と、ちょっと声を掛けてもらったら、私はもっともっと図工が好きになっていたのでしょう。

* 重要だと思ったのは「よい絵とはなにか」である。「写実的な作品だけが素晴らしいのではない」という考えは思いつかなかつた。僕は、昔から「本物っぽく」ばかり考えるが「本物っぽく」ならないもどかしさ、

また、それでよい評価をもらえない悔しさが、図工の思い出である。

僕が小学校のときに、冒頭の言葉を教えてもらっていたら、もっと図工が楽しくなったと思った。自分が現場に出たら、ぜひこの考えを伝えていきたい。

* 図工の授業で大事なことは、上手いか下手かではなく、自分の表現したいことを表現し生き生きと活動できるかであるということが最も重要だと思います。作品を作っていると周りが気になって、ついつい絵の上手さや持ち合わせた技能の高さなどに目がいき、知らぬ間に図工に苦手意識を持つ子どももいると思います。そうならないためにも、教師側が上手い下手ではないことを教えてあげる必要があると思います。大切なことを教えてくださり、ありがとうございました。

* 私がこの講座で学び、一番重要だと思うことは「評価の仕方や考え方」です。なぜなら、これらは子どもと直接関係し、今後の子どもの活動に大きく影響を与えるからです。個性の捉え方、作品を見る視点、模倣など、この授業を受ける前と後では私の考え方は大きく変わりました。これらのことは図工以外でも使えるし、使っていくべきだと思うので、これからは生かしていきたいです。

* 私は昔からずっと絵を描くことが苦手でした。そのため、絵に対して積極的に活動することができず、友人のものを参考にしたり有名なキャラクターをモチーフに絵を描いていました。

しかし、この講座で感性について学び、自分の見たこと、感じたことをありのままに表現することが大切で、そこから技術を身に付けていく必要があると教わりました。今までの私は、技術のなさや他人の否定から絵を嫌がり、逃げていましたが、絵に対してもう一度前向きになれるようになりました。教師になって図工の授業をするときは、何よりも子どもの感性のそばに立って、評価していきたいと思います。

* 私はこの講座で、評価するときの教師の視点が最も重要だと思いました。そもそも「図工の評価はどうすればよいのだろう」と、ずっと思っていました。テストなどの数値的な評価をすることも難しいから、どれだけ「キレイ」に描けているか、どれだけたくさんの技法を使っているかが基準になるのかと思っていました。しかし、この講座で図工が目指すものとその手段を学びました。また、図工が苦手な私が陥りやすい「放任」という危険性も知ることができました。

このように講座の中で、教師となる自分が苦手だという意識に囚われず、「子どもがどのように自分の気持ちを表現できているか、表現する楽しさや喜びを感じているか」を評価の基準とすべきという視点を養えたことがその理由であります。

* 図工は、子どもの絵の上手さを評価する教科ではなく、子どもの絵からどれだけ子どもの思いが伝わるかを個性重視の視点から評価する教科だということです。

自分自身が絵や工作を得意としないので、図工に苦手意識を持っていました。でも、この評価するポイントを学ぶことができ、自分自身の苦手意識もなくなり、子どもにどのように教えることができるのかを考えるのに役立ちました。体育や音楽にも通じるのですが、表現の授業での評価ポイントは難しいです。そこを学ぶことができたのは一番の財産になりました。そのために、多面的な見方が必要なだと分かりました。ありがとうございました。

* 自分が子どもの頃は、絵を上手く描くことに囚われすぎて、先生に「どうしたらよいか」と、助言を求

めてばかりでした。今も図工で扱うような活動は好きではありません。

しかし、子どもの頃に、自分がこの講座で学んだような教師の評価の観点を知ることができていれば、そこに向かって自分が努力することで、何かが変わっていたのではないかと思います。教師の評価観点は、子どもが何処に向かって頑張ればいいのかを示すひとつの目標となり得ると思います。子どもたちに、頑張るべき方向を誤解しないでほしいと、今は思います。

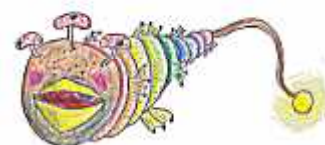
* 私はずっと図工が苦手で、絵も上手くないから評価されないとばかり思っていた。褒められている人の絵は、本当に綺麗で上手だったからである。しかし、あるとき、学校に貼ってあるポスターを見て「友だちの〇〇さんの方が上手なのになあ」と疑問に思うときもあった。

今回の講座で、思いが伝わる作品だから入賞したのだと分かり、その疑問が解けた。確かに、私は絵を描くとき面倒くさがったり嫌がったりしながら描いていた。だからよい絵が生まれなかったんだと実感した。思いをしっかり持って絵にすることが大切だとこの講座で学べて、とてもためになった。

* 教師の柔軟性が重要である。なぜなら、教師が自らの狭い枠に閉じこもらず、様々な考え方を広く受け入れていくと、自らの概念の枠が広がっていき、教師としての指導に厚みが出てくるし、子どもに指導するだけでなく教師も子どもから学び成長していくことができるから。

* 私は絶対評価が最も重要だと感じました。子どもは他人と比べて優位に立ちたがりますが、教師も同じでクラスの子どもたちを比較して成績を付けようとしています。しかし、相対的に自分を見てしまうと、子どもの中にはどうしても劣等感を抱き、自己肯定感を持たずネガティブになってしまう子どももいるはずで、実際に高度経済成長期には、系統主義により競争意識が生まれ、それについていけない子どもが増えて様々な社会問題が起きました。これに対し絶対評価は、子ども一人ひとりの中でどれだけ成長しているかを評価し、自己肯定感を持ちやすくなっています。また、観点別に評価していくことで、一人ひとりが自分の成長を実感でき、それを評価してもらえます。近年の教育現場の方針で、系統主義と経験主義を融合させた授業が求められ、まさにそれを体現しているのが絶対評価であると感じました。

今後、教師を目指すにあたって、いろいろな場面で今回の講座で学習したことが役に立つと思うことがあるので、しっかりと復習していきたいです。



くまのゆるキャラ
泳げない魚 メガミツ